

# 文字の教え方

2010.10.30 名古屋定例会  
藤坂龍司

## 1. 文字の読み

まず1～9までの数字の読みから教えるとよい。その次にひらがなを教える。続いてカタカナ、漢字と続く。教える時期はだいたい4歳児で数字とひらがな、5歳児でカタカナ、6歳児から漢字。ここでは代表的なひらがなの教え方を取り上げる。

### <教材>

ひらがなカードを作るか、ひらがなつみきで教える。

50音表で教えるのは、とっかかりとしてはいいかもしれないが、それだけだと全体の中の位置を手掛かりにってしまうので、一文字だけ取り出すと読めないことになってしまう。どうしても単音だけ取り出して教える必要がある。

ひらがなつみきだと、表に絵が書いてあり、裏は文字だけになっている。最初は表で「ありの『あ』」「いぬの『い』」と教えて行き、しばらくしたら裏返して文字だけにすることで、親しみを持たせることができるので、お勧めである。

市販の文字カードも同じだが、大きすぎるものはあまりお勧めできない。それより6cm四方程度の物を厚紙で手作りすることをお勧めする。絵は無理に描かなくてよい。多くの子どもが、文字だけのシンプルなカードで十分学習できる。逆に余計なものがない分、文字に注意を集中できて、学習が促進される場合もある。ひらがなつみきには濁音がないので、どちらにしても手作りカードが必要になる。

### <清音の教え方>

物の名前と同じ教え方でよい。例えば「あ」のカードと「い」のカードをテーブルにおいて、「あ」と言って「あ」をさわらせ、「い」と言って「い」をさわらせる。ランダムローテーションを行う。同じやり方で「う」「え」「お」も追加していく。受容ができれば、表出も教える。



ただこの頃になると新しいものの学習スピードも速くなっているので、か行以降はいきなり「か」「き」「く」「け」「こ」の5つを横並びにして、最初は端から「か、き、く、け、こ」と言いながらさわらせていき、次いで「こ、け、く、き、か」と言いながら反対方向にさわらせていき、そこからランダムに移行することで、一気に5文字を教えることができる場合もある。

### <濁音>

清音を教えたら、必ず濁音も教える。ひらがなつみきや市販のひらがなカードには濁音がないので、つい濁音を教え忘れることがある。濁音カードを手作りして教えること。そのとき、清音と対比させる必要があるため、必ず清音のひらがなカードも同じ材料で手作りすること。片方は市販カード、片方は手作りだと、それが手掛かりになって肝心の違い（片方には濁点があり、もう片方にはない）になかな

か気がつかないから。

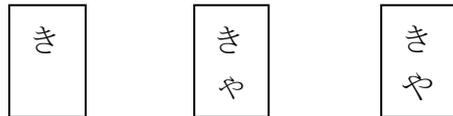
濁音（が行、ざ行、だ行、ば行）と清音が区別できるようになったら、半濁音（ぱ行）も教えよう。



<小さい「や、ゆ、よ」>

きや、きゅ、きよ、しや、しゅ、しよなどの拗音（ようおん）の読み方を教える。

「き」「きや」「きや」の三枚のカードを作り、受容→表出の順に区別を教える。



<小さい「っ」>

「こっぷ」「きって」などの小さい「っ」の読み方を教える。

「こぷ」「こっぷ」「こっぷ」の三枚のカードを作り、受容→表出の順に教える。



<単語の読み>

単語を読ませるとき、1文字ずつゆっくり読ませることも大事だが、それだけだと単語を塊としてとらえられないことが多い。そこで単語カードを作って、単語を聞いて数枚のカードの中から該当するものを選ぶ練習から始める。

その際、「りんご」「ばなな」「みかん」などだと、頭文字または末尾の文字だけに着目して選んでいる可能性があるため、「くし」「くま」「うし」「うま」のように、4択で語頭と語尾の両方の文字に着目しないと選べない問題を作る。これらをランダムで正しく選択でき、しかも正しく表出できるようにする。



単語カードの受容的弁別ができるようになったら、実物や絵カードと、単語カードのマッチングを行なう。例えば「くし」「くま」「うし」「うま」のどれかの写真カードを渡して、それに該当する文字カードを重ねさせる。それによってはじめて、単語を意味を持った音の組合せとしてとらえていることがわかる。

## 2. 文字を書く

### <教える時期>

ひらがなが単音である程度読めるようになったら、ひらがなを書くことを教え始める。数字はひらがなより先でもよいが、8や9、5などは、簡単なひらがなよりかえって教えにくい。数字を教えるからひらがな、と決めてしまうのではなく、数字を教え始めて結構教えづらい、と思ったら、それを後回しにして先にひらがなを教え始めるとよい。ここではひらがなの教え方を取り上げる。

### <教え方>

一般には文字をなぞることから教え始めることが多いが、自閉症児の場合は形を把握することが苦手なのか、いつまでも手本に頼ってしまって、いざ手本がないと何も書けない、ということになってしまうことが多い。

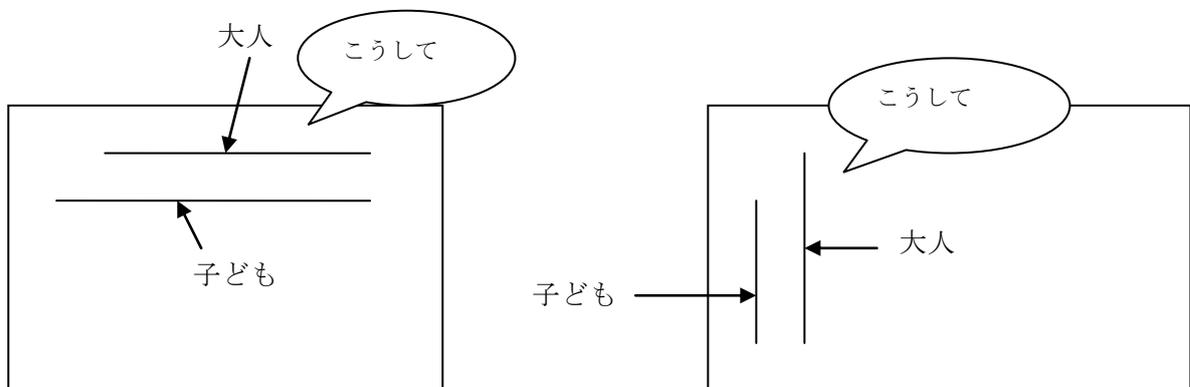
そこで線模倣から始めて、模倣を使って教える方法をとる。

### <線模倣>

線模倣はまず横線、次にたて線、その後で十字、○など。

B4版の大きな落書き帳を用意。筆記用具は同色の水性マジックまたはクレヨンを2本用意する。

#### ①たてと横の区別



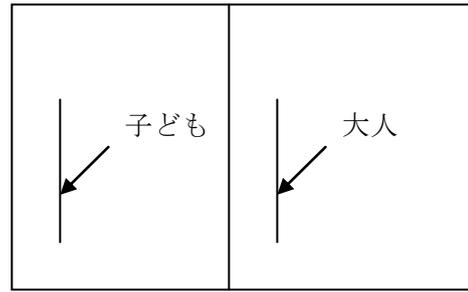
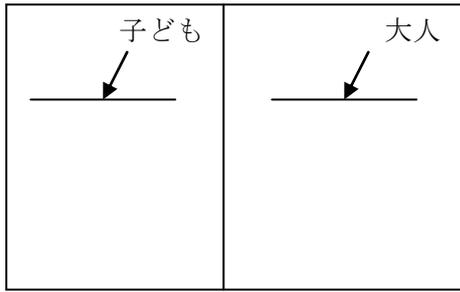
横線もたて線も、スタート地点は左上から（そうでないと位置を手掛かりにってしまう）。子どもにクレヨンを持たせて、左上に誘導してから、大人が「こうして」と言って横線を描く。手を添えて横線を引かせる。これを何度も練習し、徐々にプロンプトを減らす。紙は一回に一枚を使う。

次は縦線。同じく左上に持って行き、「こうして」と言って縦線を引く。プロンプトして縦線を引かせる。

このときのプロンプトは子どもの手を握るのではなく、子どものクレヨンの右側に大人の手の甲を定規のように当て、縦にスライドさせるようにするとよい。横線の際は手の甲をクレヨンの下に当てて、横にスライドさせる。

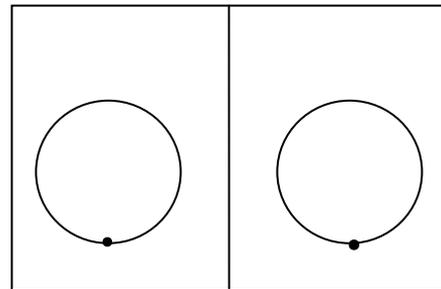
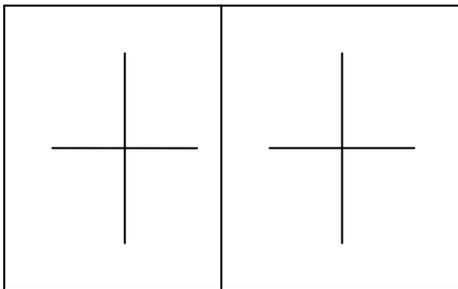
だんだんプロンプトを減らし、縦と横をランダムローテーションする。

上手になったら、今度は画用紙の中央に線を引いて、左右に仕切る。右側が大人。左側が子ども。始点は印を付けてやり、手を添えてそこからスタートさせる。フライングはさせない。大人が右側に横線を引いたら横線、縦線を引いたら縦線を引かせる。



### ②十字、○など

横線とたて線の区別ができたなら、次は十字、たて二本線、横二本線、○などを模倣で描かせる。始点は点で示し、手を添えて筆記用具を始点に導いてやる。一筆ずつ模倣させる。上手になったら、始点を固定せずに、形だけをまねさせてみる。他に、点々やギザギザも教える。

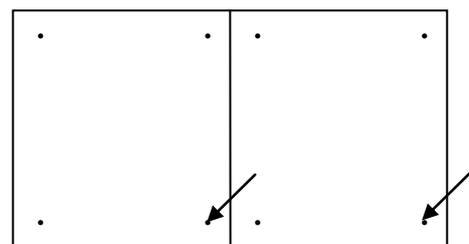
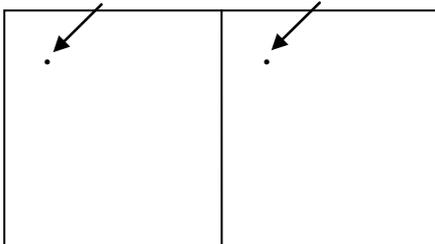


### ③点に合わせて

あらかじめ紙に書いた点に、マジックの先を合わせて（ポインティング）待つことを教える。これによって、細かな図形や文字を教えやすくなる。

最初は左上に点を打ち、そこにポインティングさせる。

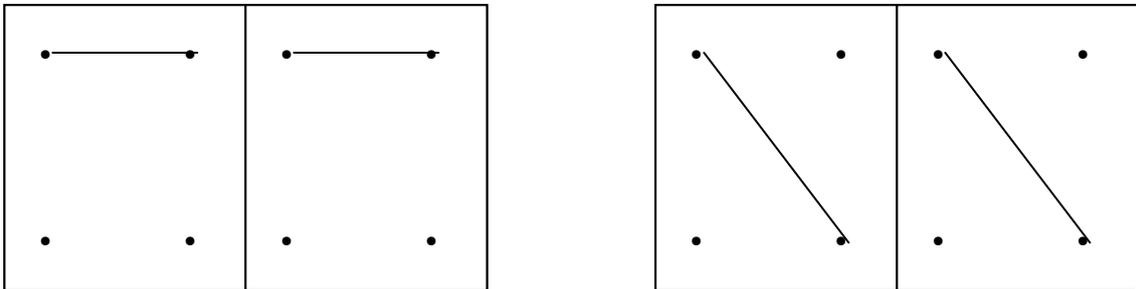
上手になったら、紙面の四隅に点を打つ。大人がポインティングした位置に、子どももポインティングさせる（例えば、大人が自分の画面で右下の点をポインティングしたら、子どもにも自分の画面で右下の点にポインティングさせる）。



ポインティングができれば、始点に手を取って誘導する必要がなくなる。このスキルを使って、もう一度、たて線、横線、十字、○などを模倣で描かせよう。

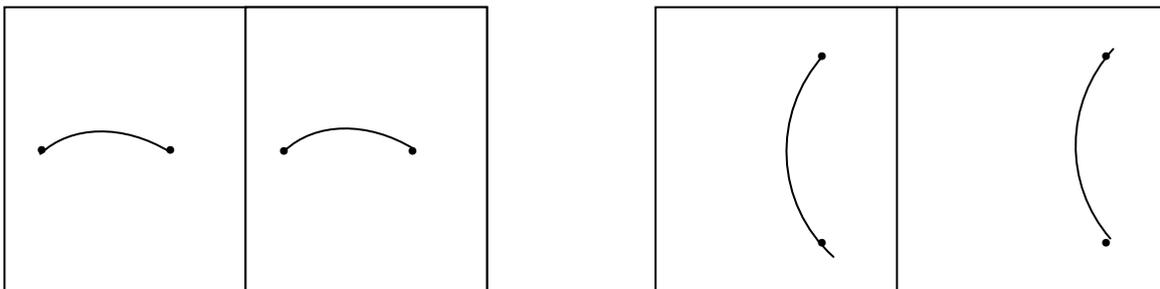
## ④点と点を結ぶ

始点にポインティングすることができるようになったら、今度は点と点を結ぶことを教えよう。ただし終点で線が止まる必要はない。始点から、指定された終点めがけて線が引ければよい。これによって、斜め線が教えやすくなる。



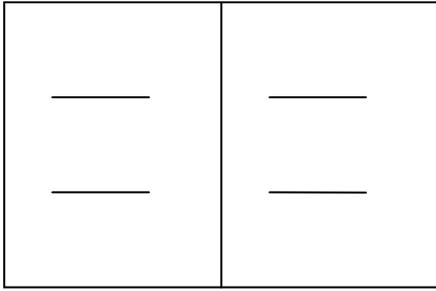
## ⑤曲線を描く

点と点を曲線で結ばせる。直線と曲線を対比してみせ、違いに気付かせる。

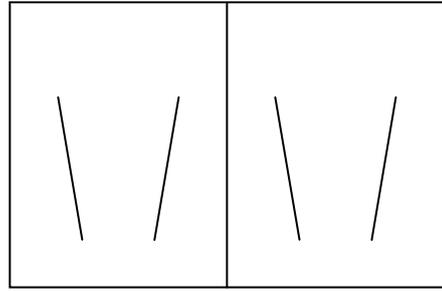


## &lt;文字を教える&gt;

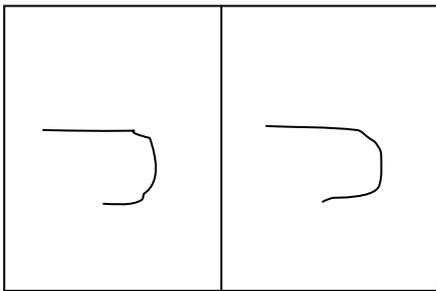
- ・まず書きやすい文字を選ぶ。ひらかななら、「い」や「こ」が簡単だろう。次いで「つ」「し」「に」など。
- ・一筆ずつ模倣させる。最初は始点に印をしておいてやる。「こうして」「こうして」と言いながら、右側に一筆ずつ書いていき、それをまねさせる。
- ・左手を、子どもの脇の下からくぐらせて、子どもの右手に下から手を添えて、そっとプロンプトする。必要に応じて右手も添える。子どもの手より、クレヨンに手を当てるようにする。ずっと力を込めるのではなく、必要な個所だけ手を添えて正しい方向にクレヨンを誘導する。
- ・次は右側にあらかじめ文字を描いておき、それを見て、左側に同じものを描かせる。最初は文字を指でなぞってプロンプト。「い」や「こ」は、最初は二本線でよい。
- ・だんだん「「い」書いて」などの指示を出し、モデルを見なくても描けるように。最初は絵をちらっと見せてあげてプロンプト。徐々にフェーディング。



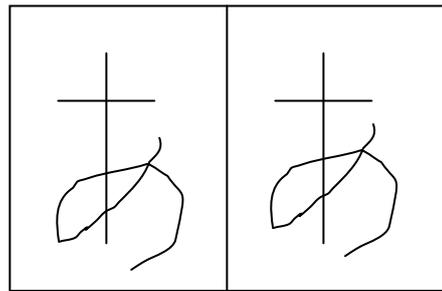
「こ」



「い」



「く」



「あ」